

マルコ福音書 15 章 1-39 節「神が苦しむのだから」

2024 年 3 月 24 日受難の主日六甲カトリック教会

英隆一朗神父

私達は、毎日の生活を送っていく中で、やはり一番私達が引っかかることは何かと言ったら、やはりしばしば大きな苦しみや、小さな苦しみが私達に襲ってくるということでしょう。それが大体突然であったり予想しない形で、私達はこの苦しみに直面しなければならないというのが私達の人生の一番の不条理ではないかと思います。なんで自分だけがこんな苦しみを経験しなきゃならないのかということは、ときにはそのように思うこともあるのではないかという。

実際のところですね、クリスチャンになって、洗礼を受けたから、この苦しみから解放されるっていうか、洗礼を受けたら苦しみがない、なんていうことをイエスは全く約束していない。時々、ほんの時々ですけど、誤解があって、洗礼を受ければ、あるいはクリスチャンとして真面目に生きていけば、私達に苦しみ来ることがないというふうに、時々錯覚することもあります。でも真面目にクリスチャンとして生きるから、苦しみがないということはないです。真面目にしようが不真面目にしようが、苦しみはやってくるということは確かなことだと思いますね。

洗礼を受けていても洗礼を受けなくても、苦しみは来るといことですね。私達がクリスチャンになるということの、その意味はどこにあるのかといえませんが、苦しまない、という約束ではないけど、でも苦しみをクリスチャンは、普通の人とは違う受け止め方ができるということ。そこに、私達に特別の恵みがある。それは確かじゃないかなというふうに思います。

イエス様の生き方を見たときに、やはり苦しみということに、イエス様が特別の意味というか、意義を与えてくださってると思いますね。それが一体何なのかと言ったら、先ほどの朗読、これから迎える聖週間の中で、非常に明らかですけど、イエス・キリストご自身が苦しまれたということですね、紛れもない事実があると、それは私達の苦しみに先立っているということですね。

だから私達が何でこんなに苦しまなきゃならないのかという問いを出す前に、なんでイエスが苦しまなきゃならなかったのかという問いが、実は隠されてると思います。イエスこそ何の罪も犯さなかった。人々に対して良いことしかしなかったわけですけど、でもそのイエスが、悲惨な形で、しかも非常に不条理な形で、大きな苦しみを担って、そして十字架上で亡くなっていくというですね、この恐ろしい不条理な事実が私達の生き方の前提にあるという、それを抜きに私達は自分の苦しみを考えることはできません。自分の苦しみにしても、家族の苦しみにしても、世界の苦しみにしても、その苦しみの前に神が苦しまれたという、その何かとんでもない事実が、私達の生き方の根底にあるということですね。だから私達がジタバタして、苦しみから逃げようということ自身もある意味必要ないというかですね。

イエス様が苦しまれてる以上、私達が苦しまなくていいという理由はないと思いますね。私達の苦しみ以前に、イエス様の苦しみがあって、その苦しみから、私達は恵みと力を得ているという、そういう前

提があると。だから私達には、様々な苦しみがありますけども、その苦しみに向かうとき、やっぱりイエス様の苦しみをまず見つけ、見つめないで、何の解答もないんじゃないかということですね。

例えば今日も出てくる、キレネのシモンですよ。イエス様が十字架を担いで歩いてるときに、この十字架が重過ぎてもう担げなかったんですよ。倒れてしまって、十字架の道行では3回倒れてる。で、もう、持てなかったんで、一緒に担ぐ人を探したわけなんですよ。

キレネのシモンというのは、かなりどんくさいタイプで、もうそのイエス様が倒れて、兵士がキョロキョロ周りを見出したら、普通の人はやばいと思ってさっと引いたりするのに、キレネのシモンだけボーっと立ってたから、体もでかい系でそういうね、貧乏くじ引く人っているんですよ。場の雰囲気とか読めずに何か悪い役が必ず回ってくる人とか、キレネのシモンは典型的なタイプなんですけど、結局貧乏くじ引いて十字架担がされたんですよ。貧乏くじ引いて十字架を担いでいるときに、キレネのシモンが考えたのは、何で自分がこんな十字架を背負わなきゃならないのかって思う本当に心の中で舌打ちしながら、ちゃんと担いでいたかどうかもわからないんですけど。とにかく囚人のイエス様と一緒に、罪人の一人になっちゃってしまって、担がされたわけですよ。彼はやっぱり、心の中で自分ほど不幸な人間はないと思ってたと思うんですけど、時々そういうことに私達も遭遇しないというわけではないですが、でもマルコの福音書は不思議なんですけど、アレクサンドルとルホスの父でって、息子の名前2人が出てるんです。なんで息子の名前まで書いてるかと言ったら、これはもう、明らかだと思うんですけど、この2人は、初代教会のリーダーだったから、リーダーとして名前が知られてたんで、わざわざ息子の名前書いたんですよ。

ということは、キレネのシモンはこの後に回心して、クリスチャンになったっていうこと。十字架を担ぐことがきっかけで、彼が洗礼を受けた。どの時点で洗礼があったかわからないんですけど、十字架を担いだときには、何で自分がこんなことをせんといかんのやっていう感じだったと思うんですけど、後からイエス様が復活したときにですね、キレネのシモンをみんながものすごく羨ましがったと思います。なぜかと言ったら、イエスの十字架をともに担いだのは、歴史上彼一人だけですからね。これは本当は弟子の仕事ですよ。ペトロとかの仕事だな、本当のところはね。弟子は逃げちゃってできなかったから、結局キレネのシモンが代わりにやったわけですけど、でも、それは初代教会の人にとって最も良い、最も素晴らしい奉仕をしたということで、みんなから尊敬されたというか、羨ましがられた。イエス様の弟子として生きる生き方を表したからですね。

それがきっかけかどうかははっきりわからないけど、イエス様の十字架を担いだことがきっかけで彼は洗礼を受ける。しかもその息子まで2人の息子までが教会のリーダーになるぐらいのクリスチャンファミリーになったと思いますね。ただの苦しみだったらそんなこと起こらない。彼はただの苦しみだと思ったけれど、「イエス様の十字架を担うという苦しみ」だということがわかったときにその恵みというか、その価値、それをキレネのシモンはわかった。

わかって彼はクリスチャンになった。一緒に十字架を担いだことは、彼の生涯の本当の宝物になった。彼の最大の勲章だと思います。それは私達にとっても、結局そうだと思います。自分でただ苦しんでるだけならば、それはただの苦しみですが、その苦しみをイエス様とともに苦しむならば、それは一体どれほど恵みと、どれほどの価値があって、どれほど自分の宝物になるのかっていうことですね。イエス様が苦しまれたってことは、私達にとっての本当の宝物だと思います。

それに支えられてるからこそ、私達もイエス様とともに苦しみを担う、十字架を担って歩いていく力と恵みが与えられる。それは虚しい努力では終わらない。復活の恵みに向かってますから。だから私達の苦しみを、イエス様が十字架の苦しみと合わせるとき、復活の恵みに向かうし、宝物になるということですね。だから苦しみがあるということは、私達の人生にとって全くマイナスではない。イエスの十字架がなかったら、マイナスのままになってしまうかもしれない。けれども、イエス様が苦しまれたからこそ、私達にとってマイナスだと思えることが全部、恵みどころか、生涯一番の宝物になる可能性があるということですね。

だから私達は恐れず進んでいきましょう。これからの人生でも、今、今現在苦しんでる方もおられるでしょうし、これから明日突然、なんかもう訳わからん苦しみが降ってくるかもしれません。災害とか突然ですから。ですけど、私達は恐れる必要性が全くない。イエス様の十字架の苦しみ、ともに十字架をになったならば、私たちにそういう信仰の気持ちがあるならば、乗り越えていけるし、そこから私達は新たな恵みの力をいただくことができるわけですから、イエス様と十字架をしっかりと見つめて、イエス様とともに歩いていきましょう。キレネのシモンみたいにイヤイヤではなくて、できれば喜んで。実際ですね、昔居酒屋でありましたけど、何か注文したらなんか「喜んで！」とかっていうのがありましたけれど、本当にそういう気持ちで日々の出来事をイエス様とともに受け止めたら、私達はそれを少しも怖がる必要も心配する必要も、全くない。

これから 1 週間、聖週間ですから、特にイエス様の十字架の苦しみをしっかりと見つめながら、それを私達の生きる糧として、生かしていけるようにですね、ともに恵みと力を願いましょう。

(©福音お休み処)